enryo

井上円了センター年報

Annual Report of the Inoue Enryo Center Vol.7

東洋大学

ISSN 1342-7628

Contents

「家職」と「奉公」―『葉隠』『夜陰の閑談』論　小池喜明……3
文学的美意識と「日本」―川端康成と三島由紀夫(三)　瀧田夏樹……31
『敬宇日乗』における中村敬宇と井上圓了　小泉仰……55
井上圓了の竹田中学校講話について―明治四十年五月十六日　茅野良男……73
勝海舟と井上円了
―勝海舟と福沢諭吉、新島襄との関係と対比させて　三浦節夫……99
大正期から昭和戦前期の私立大学における教員養成の実態
―東洋大学学生の傾向と卒業生の教職従事状況の分析から　豊田徳子……135
〈資料紹介〉一　井上玄一宛小串賢明書簡……169
〈資料紹介〉二　新田神量「日記帳」……173
〈資料紹介〉三　井上玄一宛土田忠二書簡……177
センター日誌……183
収集資料一覧……191
資料室レファレンス・資料貸出等記録……199
マネジメントにおける円了思考　斎藤弘行……3
(226)

井上円了センター年報

Annual Report of Inoue Enryo Center
Vol. 7

東洋大学

〈資料〉

『修道会雑誌』第四号掲載　井上円了関係資料

●論叢学林「井上博士講話筆記」（一～五頁）

学問をするには其土地といふことが大変に関係する、私はこの竹田に参りて見て学問に余程適した土地であると思ひました、これはこの地の学生の幸福です、大体学問は田舎でする方がよい、専門の教育はとにかく、中等教育までは田舎に限る、空気は清潔で健康に適し悪しき誘惑物がない、東京などはよい生徒も沢山あるが悪い生徒も多い、年の若い分別の定まらないうちには悪い方に引かれて堕落し易い、併し田舎にも欠点がある、其一つは外界の刺激が少いから小成に安ずるといふことです、地方では最高の学校は大抵中学校だから中学校に入れば得意になつて安心して仕舞ふ、世間までが中学生を重く見すぎる、これが学問の進歩を妨げる、東京などでは学校の数が非常に多くて上に高等専門の諸学校あり大学ありといふ具合で、中学校を卒業したからとて決して頭は上らぬ、だから安心せずに常に勉強する、此の点は都会の方が利益だ、つまり中等教育までは田舎でして田舎の欠点に注意して其れを避けるやうに為しさへすればよい。

も一つ山間の土地などの欠点は地形が狭く従つて見る境遇が狭く、之が人の精神上に影響を与へて自然気が狭くなる、御当地なども四面は峨々たる岩石を以て囲

まれて居るので風景に於て申分はありませんが万一この欠点はありはすまいか、併し之は私の想像に止まるのです、とにかく地勢狭少なれば自然の結果気が狭くなり、人と衝突し易くなる、人を容れがたい、永遠を期して仕事をやる事ができなくなる、この結果忍耐心がなくなる、之は地形より来る不利益の点です、この地方のみならず一体日本の国が第一狭まい、外国で見る如き広漠たる平原がない、山岳も河川も甚だ小さい、故に外国人が来遊して日本には山も川も平野も無いといふ、尤もなことである、私は昨年満州に往きました、奉天の平原など驚くべきものです、其他アメリカあたりの茫漠たる大平原など到底日本で想像は出来ません、ヒマラヤ山にも出掛けたことがありますが其の雄大なる景色言語に尽されない、こんな景を見ることが大変精神の修養になる、かゝる景色に対しては小なる心、狭き心、杞憂などは消滅して仕舞ふ、日本人の心を広げるに一番大切なるは地理学です、西洋などに行つても少し眼色の変つて来て居ると思ふばかりでさまで注意しもせない、直ちに看過し去るのである、ところが外国人が日本に来ると多数の日本人は物珍らしげに見せ物でも見る如くそれを取り巻いてがや〳〵騒いで居る、その顔付まで馬鹿な風をしてポカンと見て居る、支那や朝鮮に旅行してもさうです、西洋では決してこんな事はない、西洋の子供は時間の観念が非常にあるが、これは食事の時も菓子を与へる時も一定して居るからである、途中に遊んで居る時は外国人でも誰でも少しも区別を設けず時計を所持して居さうな人であつたら直に馳け寄つて何時ですかと聞く、無邪気なもので一向に他国人といふ区別を設けない、私が洋行した時或る小学校を参観した、各教室を之れが日本の人だと連れてあるかれ観に行つて見せ物にあふた事がありますが、其時学校の先生が私に私の姓名を問うてその国の国字で黒板に井上円了と書いて、どうぞこの下に貴国の文字で貴殿の姓名を書いて下さいといふ、そこで承知したと白墨を取つて其の下に日本字で井上円了と書くと、生徒は珍しげに見つめて居たが、

やがて生徒等は一同手帳といはずハンケチといはず自分が只其処に持つて来て居るものを皆持つて来て私にも私にもどうぞ今のやうな字を書いて呉れとやつて来た、仕方がないから因縁と思うて沢山の児童の需に応じ書いて与へました、さういう点が実に真面目で快活で、子供までが天真爛漫大国民の気風がある、そして諸外国の郵便切手を蒐集することをやるなどでよく地理を知つて世界の事情に通ぜる結果として如此他国人に隔てない、どうか日本人も大国民の気象を養成したい、土地の窮屈なのは仕方がないから其欠点を補ふため地球儀と地図とは常に座右に置きたい、これでたしかに大国の気質を養ふことが出来る、日本人の将来の仕事は海外にあります、海外に雄飛して休息する時はこの世界の公園たる日本に帰るといふやうな考にしたい、亜米利加人などは夏は欧州で暮し、自分の国を働き場として居る、何分海外思想を盛にするが必要で英国の進歩したるも此故です、日本の将来もどうか英国のやうにしたい、英国は国全体としては日本より小さい、併地形が大陸的で山など少い、之に反して日本は総体小国的地形です、だから前申した通り地球儀地図其他雄大なる景色の写真などで思想を拡大することにつとめ大国民の気質を養成したい。

それから誰でも西洋に行つて先づ驚くのは西洋人の能く勉強することである、私が先年英国に行つた時一英人が或時私に問うて曰ふには日本では芝居は何時に始まつて何時頃に終りますかと、私は日本では朝から始めて夜分まで続けてやりますと答へた、英人は、そんなら芝居見物に往くものは労働する暇はないではないかと不思議がつて居た、西洋人は働く時には一所懸命働く、遊ぶ時には熱心に遊ぶ、日本人は遊ぶが如く働く如くきまりが悪い、西洋人は思ひ立ちやり掛けた事は百折撓まずやり通す、要するにその特長は忍耐勤勉にあり、日本人はさう行かぬ、私は謎を二つ作つた、其一つは日本人とかけて何と解く、貧乏人の嫁入と解く、其心は長持がない、も一つは日本人とかけて、手紙の文章と解く、心は候（早老）が多い、気候の暑い

処は遊怠に流れ易く、活計が立ち易く暮しよい処もさうである、地質などの悪い所は勤勉となる、竹田は暮し易いところであると聞くが私は或は勉強心を殺ぐ事は無いかと考へる、なんでも諸君は勉強しなければならぬ、私が以前病気に罹つた時のことである、一疋の蟻が枕頭に来た、追ひ払へども〳〵また来る、私は其時一つの感が起つた、若しこの蟻が始終休まずに歩んだならば幾年費さば地球を一周するであらうかと、試みに尺と時計とを取り寄せ蟻の速力を計り計算したが、この蟻でもやすまずに歩めば八十年かゝれば一周出来る、これが蚤ならば四年かゝれば出来る、人間は忍耐勉強せねばならぬと考へた、西洋現今の進歩もみなこの忍耐勉強のつもりたる結果に外ならぬ、この竹田地方は生活し易き由なれば殊にこの忍耐と勉強との二つを諸君に御すゝめ致します、折角この人間に生れて来た以上は小なり大なり何か一つの紀念を此世に止めなければならぬ、出来ぬことを為すべしといふのでは無い、自分の力に相応した事に全力を注ぎ生命の有らん限やらねばならぬ、人間が十五才以上になると色々の欲が起る、青年の身を誤るは大抵これから起る、けれども一生の紀念事業即ち永遠の目的確立せばつまらぬ情欲などには誤られることは無くなる。

私は今度九州の各地を巡回したのですが学科に就いては何処の中学も文学の方は概して長所で、英数は短所であるらしい、ところが此の英数が一番必要である、数学程人の頭を緻密にするものは無く、何処の入学試験にも英語を要せない所はない、中学の教育上ではどの学科も必要で軽重はない、一様に勉強せねばならぬ、併し中学卒業以上に於いては英数最も必要です、英語など研究するのは今と昔と比較したら今の方が余りに容易に習はれるから学生が勉強せぬ、今は余りに学問が安楽に出来過ぎる、私共が書生の時代はとても今頃のやうに気楽には出来ぬ、教へる人も所謂変則流で発音も何も有つたものではない、「ナイト」（夜）など「ニグフト」と読んだ私が大学の予備門に入る時など英語で困つた、幸に数学の方が九十点位あつたから

入るを得た、今の加藤博士の学生時代など西洋学をやるに字引が無くて困られたものです、諸君が吾々の勉強したほどやればエライ者になれる、苦学をした古人と同様でなくともその半分やつたら大したものだ、習ふことの安楽なるため、なまけぬやうに願ひたい、そして当竹田には軍人の方面には広瀬中佐を出したがこの先き各方面に中佐を出すため将来の方針を立て一生の紀念を残すため永遠の計を定めて勉強ありたい。

（三宅直太郎記）

●文苑「硯滴」第五年級菊地仁齢（三四～三九頁抜粋）

●日本人は、大陸的思想を有せず、島帝国々民は、大陸的進取の気慨を具へず、規模狭小、箱庭的の区々たる小民に過ぎずと称ふる外人あり。否、自ら嘲りて、快しとなす変人あり、咄々、何ぞ尾籠極まるや。

日本人が、大陸的気趣を有せざるは、固よりさあるべきことなり、其の生を島中に受けたる、人民のかくの如きは、寧ろ当然のことなり。況んや、其の未だ多く外国の事情に精通せざりし四十年以前をや。また況むや、対外的事業の、一々幕府の圧迫に妨げられし時代おや。然れ共、全然この気象なかりしに非ず、二百年前には、山田長政の如きあり、三百年前には、豊太閤の如きあり、若し、長政をしてスペインにあらしめば、彼亦、亜米利加発見の月桂冠を獲得したりしや測る可からず。豊太閤をして欧洲にあらしめば、豈に歴山大王、奈翁の下に出でむや

更に、日本国の地勢を案ずるに、四面海に閉されて、国内山脈蜒々、縦横に起伏して、到底、大陸の比に非ずと思はるれど、必ずしも杞憂するに及ばず。吾人をして、忌憚なく之を言はしむれば、日本は大ならざれ共、雑ならず、小なれ共、秩序あり。問ふ勿れ、山水の清国に於けるが如き雄大豪放なるなく、頗る女性的に優長なるは奈何と。彼の粗笨尨大、何ぞ論ずるに足らむや。吾の女性的なるは、日本をして今日あらしむるもの、女性は、能く豪傑を養ふ。女性の健全なるものが、能く寧馨児を育つるは、古今共に同じ。而して

山水の女性に於けるも、畢竟かくの如きのみ。

●理学博士山川健次郎氏は、英語のゼンツルマンを訳して、士君子と言ふ、蓋し、之を紳士と訳するは、大にゼンツルマンの真相を誤れりと言ふにあり、英国人の所謂、グレートマン、ゼンツルマンは、恰も、吾国の君子にして、其のカレーヂ即ち勇気は、吾が武士道位に、重き思慮をおけり、されど、日本人の紳士は、最も趣きを異にして、ハイカラ式の、虚栄者流の人物を指し示せば、事実全く錯誤せるなり

山川博士と、井上円了博士とは、其の演説振り、其の手真似振り、殆ど同人の感あり、

●曾て、釈雲照律師の講話を聴く、師は、米寿を超ゆる、数歳なれ共、端然として、而かも明晰なる語調を以て謂へりき、

吾が信仰する所は、二三千年前、少くとも、六百年前にあり、ソレ以後は相手にならず、

教育の裡面は宗教なり、教育と宗教とは、一体にして、離る可からず、

師は、兎に角不凡の人なり。余等の敬虔すべき人なり夫れ人、人間以上の事業を成さむとせば、先づ宜しく師に傚へ、吾人は、師の尊き人格に接して、恰も、神仏の前に跪けるが如き心地したり、師の如きは、蓋し稀なり、

●米国には、理化学家にして外交官たりしフランクリンあり、支那には、文章家にして宋の宰相たりし王安石あり、更に、吾国には、文学家にして徳川氏の総理たりし新井白石あり、彼等が、巧妙なる手腕を以て国家を経綸せし事蹟を憶はば、歴史が吾人に与ふる教訓は、蓋し少からざるを覚えむ、

●以上の中、多くは、昨秋ものせし日記の片録なり。当時の感を失はざらむがため、実際とやゝ矛盾せる点も、別に修正を加へざりき。（十月廿八日記）

●校記会録「四十年記事」（六四頁）

○井上博士来校　兼ねて九州漫遊中なりし井上博士は鹿児島宮崎を経て竹田に来られ五月十六日本校講堂に

て一場の講話ありき。（筆記別項）

〈資料紹介〉一

井上玄一宛小串賢明書簡

拝啓井上先生御来営ニ付度々御書面ヲ賜申候最後ノ御言葉ニ

「拝啓先便申上候通リ御地へハ六月二日夜半後天津発、三日二時半講邦内子着同三時十五分同所発、六時廿分営口着可仕候拙者ハ単身独行加之言語不通ニ候間日本人一名講邦内子へ御差出被下候様御配意願上候六月四日ハ御地開会五日午十二時営口発ニ乗込大石橋ニテ換車、当夕八時大連着七日帰航ニ就キ可申候右様御承知可被下候

大正八年五月三十一日天津ニテ井上円了

小串賢明宛」

右ノ御書翰ヲ頂キ三日早朝営口発車ニテ世話係一名講（コー）邦内子（ハンズ）、奉迎為致候拙物并ニ当所世話係十四名三日午後五時揃ニテ営口汽船場ニ至リ出帆ヲ待テ河水停車場へ御出迎申上タルニ予定ノ如ク六時廿分御着被下直チニ御乗船被遊候船中階上ニ室内ト室外トニ腰掛ケノ設備有之無風ニテ先生ハ室外ノ方ヨロシトテ営口市ノ方面ヲ御覧被遊候七時半当所へ御着後御入湯、御夕飯（私ハ昼飯ト夕飯ハ何ツモ御正（ママ）伴仕リ候）夕飯ニハ和酒昼ハヒールガヨイト被仰両回共如仰差上申候御休息後同夜十三枚御揮毫墨モキレタシ疲レテオルカラ明日書クト被仰御床臥被遊候

○四日朝六時御起床私ハ御仏前ノ御掃除ヲシテ居リマシタガ先生本堂へ御越被遊御拝礼相成御仏前テ御挨拶申上候朝食後昨日講邦内子へ迎ヒニ来テ呉レタ人ハ何ント云人カト御尋デ田辺源吉ト申上タレハ手帳へ御控ノ様ニ被存候午前十時より十二時頃迄御揮毫、御昼飯後世話係ニ御逢坐談暫時午後二時過教育ト仏教トノ演題ニテ趣味アル御講演被下タリ御講演ノ終リ頃より俄カニ暴風雨夜会講演開会ノ時迄引続キ候聴衆ノ多少ニ

不抱真理的妖怪ノ題下ニテ長談被下御講演後御夜食ヲト申上タレトモ夕飯ニ沢山ヤツタカラ酒モ何ンニモ入ラヌトノ仰セテ差上マセナンダ途中ブドー酒ヲ貰テ来タカラトテ私ニモ一杯ツイテ被下先生モ少シ召上カラセラレ候私ヤ愚妻ガ時々御伺申上テモ何ンニモカマウテクレルナト心易ク仰セラレマシタ、講演ヤ御揮毫ノ間ニハ何ツモ書面ナド御認メテアリマシタ

○五日朝前日来御認メノ天津本願寺行ノ揮毫及信徒ヘノ揮毫又ハ御書面沢山郵便ニ出シテ呉レトノ仰セテ御急キナレハ直クニト申上タレバイヤ急ギナイカラアトデヨイトノ仰セデ六日朝漸ク着出シ申候、前夜講演後中村常三郎より書画帖ニ張ノデアルカラトテ小物四枚分願出申候得共時間モオソク御疲レト存シ控ヘテ居リマシタガ五日朝飯前願テ書テ頂キマシタ此レガ御一代最終ノ御揮毫ト存シ候小物二枚丈ケ取寄セ御遺族様ヘ御記念ノ為メ御送附申上候間御請取被下度候前夜御床以前ノ仰セニ高価ナ品テナク支那人ノ常ニ遣フテオルモノヲ求メ度ト思フテ居タガ買ヘハ邪魔ニナル故今迄求メナンダガ明日ハ午前中暇モアリ大連カラ直ク帰ルノデアルカラ買求メ度トノ仰セデ早速旧市街より参テ居タ世話係ニ話シ候処田村忠一君御前ヘ御伺申上略ボ御買物ノ品ヲ承リ五日朝店ノ者ト相談シテ書出シ御待申居リ升ト電話カヽリ申候又前日領事館より井上博士ノ為メ馬車御入用ナレハ差上ケ升ト申上来候ニ付午前八時ニ当所ヘ回ハシ呉レトタノミタルニ予定ノ時尅ニ馬車参リ候故先生直ニ御乗車私モ同乗御供申上旧市街（支那人ノ町）東来醤園田村方ヘ至リ田村忠一氏御案内申上候田村君ハ随分背ノ高キ人物ニテ歩行最モ早ク夫レニ劣ラス先生ハ御歩キデシタ私ハ五六間斗リオクレルノデ先生ノ御達者ナノニ感心シテ御供シマシタ帰途領事酒匂氏官宅ニ御立寄リ領事ニ御面会被遊、別ニ用事ハナイガ一寸挨拶ニ寄タトノ仰セ御急キニテ直ニ御乗車領事モ御乗車ヲ御見送リ申マシタ、当出張所御帰リハ十時四十五分直クニ籠ニ御買物ノ品ヲ詰直シ支那人用ノ棒ト雨傘御自分ノコウモリトヲ一括シ此ノ籠ハ汽車ニ持テ御ハイリ被遊テハ如何ト申上タレハ、イ

ヤコンナモノヲ一等室ニ乗ルモノガ持テ這入テハ人カ笑フカラ矢張リ預ケテ呉レトノ仰セデアリマシタ、御昼飯後両名世話係ヲヨビ御礼ヲ申上ケ御講演ノ御礼ト御揮毫ノ御礼ト別々ニ包ムカ本意テアリマスガ乍失礼合併デ済マセヌガト御断リ申シ差上ケタレハ裏ヲ返シ御覧（弐百円）被遊雨テ講演モ充分不出来コンナニ沢山貰テハ済ヌ此ノ半分デヨイニトノ仰セ、イヤ甚タ軽少デ済マセヌト申上ケタレハ夫レテハ折角ノ志、コーシテ貰テオイテ返礼ヲ何トカ勘考シヤウト仰セラレアナタノハ分テ居ルガ骨折テクレタ世話方ノ名ヲト仰セラレマシタガイヤ汽車ノ中デモヨイト仰セラレ御乗車世話係一同駅迄御見送申候直チニ駅長室ヘ御案内申タルニ酒匂領事モ奉送ノ為メ参リテオラレマシタ、三日夕御着ノトキ大石橋より先生ニ一寸御立寄被下暫時テモ御講演被下事難出来やト願出マシタガ何分時日ナキ為メ断マシタ馬車中ノ仰セニ来年ハ奉天ヘ来ル考ヘテアルカラ此間ノ大石橋ヘモ出張シテモヨイガ何レヘ手紙ヲ出セハヨイガトノ仰セデシタデ矢張地方事ム所ヘ向御出シ被下度旨御答申上候其他満洲御巡回ニ付テ便利上ノ話モ色々申上ケタ次第ニ候汽車中世話方ノ名ヲト仰セデ御断申タレトモ是非トノ仰セデ不得止申上タレハ手帳ヘ御記入デアリマシタ、大石橋テ三十分間発車迄時間ガアルノデコーヒ等差上ケテオル内汽車ハ北方より着シマシタ先生ハ御急ギテ御乗車被遊車中カバンよりコップ二個フドー酒ヲ御出シ被遊私ヘモ一杯飲メトテツイデ被下先生モ一杯召カラレマシタ領事モワザ〳〵送リテ呉レタコト共御思召シテ一枚御揮毫被下大連別院ヘ私ガ近々法要デ参リマスカラ御預ケ被下様願フタレバ御快諾被下イヤ大連デ書テ郵送スルカラ届ケテ呉レトノ仰セデシタ依リテ先生ノ御快諾被下タ御意志ヲ領事ニ届ケ度ト存シ他ノ分ヲ御用シ領事ヘ委細陳述シテ渡シマシタ、又世話係ヘモ其後御礼ニ付テノ御言バヲ申伝ヘタルニ僅少ノ御礼デ先生ガ喜ンテ被下事ハ吾々営口ノ世話方トシテ光栄デアリマスト一同大ニ喜ビ申候

○六日朝大連東別院より急電ニ接シ先生ノ御逝去ノ悲

報何トモカトモ打驚クノ外無之実ニ夢心地致し夫より各世話係へ電話ニテ知ラセ同夜集合致し先生ノ追吊会修行ト乍些少金弐十円御香資ヲ呈スル事ヲ協定仕候会スル者一同アーアーアーノ驚歎ノ声ノミニ御座候

高堂各位ノ御愁傷之段奉遠察候十三日より大連別院法要ニ付十二日出連御賢息様ニ拝顔仕リ度心算之処去ル六日海城県ニテ当所同行ノ者馬賊ニ殺サレ遺骨十三四日内ニ持帰ル旨電報参リ乍不本意欠礼仕候為不悪御承引被成下度右先生ノ御書小物二枚分御香資ノ弐十円乍些少郵送仕候間御落手被成下候得者幸甚之至ニ奉存候先ハ御悔旁先生ノ様子見聞ノ儘拝陳仕候

草々頓首

営口本願寺出張所　小串賢明拝

六月十四日　同　世話係中

井上玄一殿

本資料は、井上民雄氏（本大学名誉顧問）より提供を受けたものである。内容は、中国営口本願寺出張所の小串賢明氏が井上円了の子息玄一氏に宛てた書簡である。井上円了は大正八（一九一九）年五月五日に中国各地の巡講に出発し、同六月五日大連で講演中に脳溢血で倒れ、翌日逝去した。この書簡は、六月二日に営口に到着した井上円了が、三日と四日に講演と揮毫に応じ、五日に営口を去るまでの様子と翌六日に訃報を受けて以後の状況を子息に報告したものである。巡講は、当地の本願寺の「世話係」の手をかりて行われ、その任の中心であった小串賢明氏は、資料にみるように亡くなる数日前の井上円了の様子をかなり細かく記している。井上円了は、六日の大連での講演後の翌七日には帰国する予定となっており、営口で家族へのお土産などを購入している。書面からは、井上円了が長期間にわたる巡講でかなり疲労していた様子がうかがわれるが、これに関しては井上玄一「父円了の娯楽・道楽」（『サティア』第二〇号　一九九五年一〇月発行）および新田神量「井上円了先生御臨終記」（『同』第二一号　一九九六年一月発行）の中にも記述されている。

〈資料紹介〉二

新田神量「日記帳」

〔表紙〕

日　記　帳

六月五日

午後八時着連、直ニ馬車ニテ西本願寺幼稚園ニ向フ休憩ノ後八時四十五分講演開始九時五分発病開業医板谷丈夫脇谷次郎医ノ診察ヲ受ケラル食傷ト診断、十時五十分満鉄医院内科医長戸谷銀三郎博士来診脳溢血ノ徴候アリト診断種々手当セシモ刻々危険トナリ昏睡状態ニ陥リ六日午前一時頃全ク絶望トナリカンフル注射ヲ施スコト二回二時四十分遂ニ逝去セラル六時遺骸ヲ大谷派別院ニ移シ通夜ス

発電左ノ通リ

六月六日午前一時十分発博士留守宅宛

博士講演中脳溢血発生人事不肖トナリ手当中余後計リ難シ

〃　午前三時二十分発博士留守宅宛

博士午前二時四十分逝去ス

〃　〃　本山宛

井上円了博士脳溢血ニテ午前二時四十分逝去セラル

六月六日午前七時四十分発新潟県三嶋郡来迎寺村字浦慈光寺宛

博士講演中脳溢血発生午前二時四十分逝去セラル

六月六日午前七時四十分発東京市本郷区富士前町五十二井上玄一宛（至急報）

博士遺骸所置指図俟ツ直返

六月六日午前七時四十分発営口本願寺宛
博士講演中脳溢血ニテ逝去セラル
六月六日午前八時五十分発天津日租界本願寺別院宛、
井上博士脳溢血ニテ逝去セラル
六月六日午前八時五十分発上海東本願寺別院宛
井上博士講演中脳溢血ニテ六日午前二時逝去セラル
六日午前十一時大連病院より医員出張
遺骸の防腐注射を行ふ
六月六日午後十時福岡工科大学金子恭輔宛（同氏電文問合セニ対シ返電）
井上博士六日午前二時四十分逝去セラル
〔欄外〕
六月六日本山ヨリ新田輪番宛着電如左
井上博士ノ逝去ヲ悼ム万事遺漏ナク取計ハレタシ
六月六日午後十一時四十五分東京井上氏宅より返電来る
玄一明日朝立つ荼毘待て
仝七日午前十一時過き東本願寺別院井上先生葬儀係宛
山田一五氏より吊電を送らる
先生の御不幸に接し驚悼に堪えず謹んて哀悼す
仝七日午後四時新井石禅師より井上随行員宛にて吊電あり
井上博士の御逝去を哀悼す
仝　午後五時奉天にて田中舎身居士より発せる吊電来る
教界多事の節井上博士唐突ノ逝去を悼む

六月七日午後九時満南金谷少将ヨリ左ノ吊電ヲ寄セラル

井上博士ノ御逝去ニ対シ深ク御悔ミ申上グ

六月七日午後十一時半金子恭輔氏ヨリ左記吊電ヲ接受ス

貴電見タ御高配ヲ感謝ス宜シク御願ス

〃　天津岡崎司氏ヨリ左記吊電ヲ接受ス

哀悼ノ至リ夢ノ如シ

〃　天津石黒慶信氏ヨリ左記吊電ヲ接受ス

井上博士御逝去驚キ悔ム

六月七日午後十二時三十分東京塩谷恒太郎氏より東本願寺別院井上円了宛吊電ヲ受ク

深く哀悼す

六月八日午前八時廿分上海本願寺別院輪番蕪城賢順氏より新田神量宛吊電を受く

井上博士の逝去を悼む

同　八日午后十二時四十分京城真鍋氏より井上博士随行員宛にて吊電来る

哀悼に絶えず

六月六日当直如左

鈴木庸生　黒田伊平　能登庄三郎　袋布要太郎　松坂甫　野村宗　万玉惣太郎　八森安太郎　広津嘉一郎

其他の同行十数名

六月七日当直如左

鈴木庸生、袋布要太郎　松坂甫　野村宗　能登庄三

郎　万玉惣太郎　広津嘉一郎

其他前日ト同ジ

八日当直如左

篠原惣兵衛　能登庄三郎　野村宗　八森安太郎　色木庄太郎　広津嘉一郎　西島徳蔵

其他前日ト同ジ

九日当直如左

広津嘉一郎　万玉惣太郎　野村宗　松坂甫　八森安太郎

其他前日ト同ジ

本資料も、井上民雄氏より提供を受けたものである。井上円了は、大正八（一九一九）年六月五日の夜「満州仏教青年会」主催で行われた大連幼稚園での講演中に倒れ、翌六日午前二時四〇分に脳溢血で逝去した。資料は、真宗大谷派東本願寺大連別院の初代輪番である新田神量氏（明治三八年哲学館第一科卒業）が、井上円了が亡くなるまでの容体、その前後に各方面に発した打電および返電の文面、当直者の名前を記録したものである。「大谷派本願寺別院」と印刷された罫紙六枚に書かれている。訃報を受けて子息玄一氏と東洋大学および京北中学校関係者が大連に到着するのは、六月一〇日であり、その前日の九日の当直者名までが記録されている。

〈資料紹介〉三

井上玄一宛土田忠二書簡

〔封筒表〕

名古屋市中区
御番所町北丸屋三七
井上玄一様

〔封筒裏〕

大連桜町九〇
土田忠二

拝啓益御清祥奉賀候陳ハ尊大人墓碑除幕式ノ義昨日無滞相済候其状況専一に申上候ヨリモ新聞紙ノ記事ヲ以テ致シ候方早手廻シト存シ別紙封入候物御閲覧下サレ度願上候尚御序ノ折東京御母上様之方へ御回送下サレ度願上候御墓碑ノ形式ハ東京ノモノト全ク同一ニ之有候ヘトモ岩ノ壇上ニ立チ居リ候其位置モ若草山ノ中腹ニ位シ東本願寺領域ノ最高所ニテ至テ眺望宜シキ義ニ候之か故ニ大連ニ一名所か増シタル感有らん墓碑ノ立チ候壇ハ三間四方ト存候何レモ花崗石ニ有之候

開式ノ辞ヲ述ベテ故博士ニ望ミタル斉藤鷲太郎氏ハ現本市会副議長（前ニ衆議院議員タリシ事アリ候）弁護士ニテ本願寺檀徒総代ニ候市長代理ノ次ニ出デタル立川氏ハ昔、政界ニ名ヲ轟カセタル所謂「臣雲平」ヲ以テ有名ナル立川雲平氏ニ候次ニ出テタルハ上田恭輔トテ満鉄ノ万年秘書ニテ社内第一等ノ□□（不明）所ノ支那風俗等其他何事ニモ□（不明）渉深キ人ニ候次ノ松山程三ト云フハ当地大連神社ヲ創設セシ人ニテ今ハ産霊教ナル神道ノ一派ヲ創メタル人ニ候コレハ新潟県人ナル上ニ壮年ノ時大人ノ著書ニテ裨益ヲ得タリト云フワケニ候次ニ門弟総代トシテ謝辞ヲ述ヘタル小山内大六氏ハ長ク東京ノ日本新聞ニ在リ今ハ当地満州日々新聞社長タル人ニ候哲学館卒業生ト申ス事ニ候昨日新聞ニ洩レタル人ニテ

当地ニテ社会的ニ名アル人トシテハ
服部第一中学校長、岡内□(不明)作（関東□□(不明)記官ニシテ
大連語学校長）ノ外市会議員三人、小学校長一人
アリ総計ニテ五十余人ト見受ケ候丁度日曜ナル折柄トシテハ出席者ハ必スシモ少シト申セズ候（日曜ナラザル方カ一般ニ□□(不明)時出席者多ク候）尚又西本願寺幼稚園幼児見日曜学校生徒参百人程カナリ暑気甚シキヲ関セズ参列シテ讃仏歌ヲ奏シ候又本願寺ノ信徒ノ主ナル人ハ皆出テ、奔走シ来賓ノ接待其他ノ事ニ当ラレ候又除幕ハ新田氏ノ令嬢（五才位）ノ手ニヨリテ行ハレ候
以上ニテ大体新聞記事ノ補足ハ尽シ居ル事ト存候小生ハ多分七月卅卅一両日ヲ以テ札幌ニ開カル、全国高女校長会議ニ出席致候事ト存候大急ギニテ参リ又帰リ来ル筈ニ候ヘトモ閑有之候ヘハ御地ニ御寄リ申上候テ御目ニ掛リ度ト存居リ候尚目下津ニ罷在候□(不明)□其他目下当地ニ参ル事ノ相談始マリ居候小生前述ノ通リ出張候ヘハ其帰リ、同伴ノ考ラルヘトモ次第ニヨリテハ本月中ニ津ヲ出発シ候□(不明)ニモ存セラレ候
東京ニテモ豊事少し不加減之由兎角胃か□(不明)キ様ニ思ハレ候出張ノ途次ニ御面会出来ル事ト思ヒ居候外務者ノ方稍多忙過グル様ニモ存候
乍末奥様ニ宜シク願上候御子様方御成人ノ御事ト存候
早々不一
土田忠二
六月七日
井上玄一様

〔同封新聞切り抜き記事〕
故井上博士建碑除幕式
七周忌の命日を迎へていと厳粛に挙行さる
既報予て若狭町東本願寺別院内に建設中の故文学博士井上円了氏の記念碑が竣成したので本日午前十時から碑前に於て厳粛な除幕式が挙行された、参列者は
田中東洋大学教授、小須賀助役・立川市会議長、斎藤鷲太郎、上田恭輔、小内山大六、土田忠二、宝性確成、坂井慶治、野村宰

の諸氏並に故博士の門弟縁故者、東本願寺別院門徒等五十余名、新田東本願寺輪番並びに一山の僧侶の読誦に次で東本願寺並びに西本願寺の日曜学校生徒二百八十名の愛らしい讃仏歌あつて後門徒総代斎藤鷲太郎氏は故博士の徳教を讃し博士の遺言に基いて此の地に建碑した旨を述べて開会の挨拶に代へ次で田中東洋大学教授は

私は東京方面を代表して参列致しました、井上先生は哲学者であり教育者であつて明治二十年頃我か国に欧風か殺倒した当時に於て東洋哲学を高唱力説されましたが今日に於ても故先生の卓見が偲はれます、先生は第一に我が国固有の長所の維持と発揮に全力を尽され第二は哲学の社会化を実行され第三は努力主義精力主義を教へられました。而も博士は身を以て人を率ゐられたのであります、私共は先生の遺訓によつて今尚教へ導かれて居ります

とて博士の思想及び言行を述べ、次で小数賀助役が市長の祭文を代読し

立川議長は

円了井上博士が大正八年の今月今日講演最中に逝かれた事は人生崇高の極である、彼の早川社長が奉天に於て講演中に病を発して逝かれたのと共に私の忘るべからさる処である、人は生地と離れない困縁がある、例へは岡崎の地を通る者は家康を懐ひマンチエスターを通るものはコブデンを偲ぶ、之れと同様に死地と離るべからざるものである、大連には雪斎、鉄□(欠)両氏の建碑もあり、本日此処に此地で逝かれた井上先生の建碑を見たのは真に有意義な事であり且又人生到る処に青山ありの活教訓である、在満同胞は須らく此の地を墳墓とすべし

と述べ其他博士の囲碁亡国論、健忘論に就いて述べ次いで

上田恭輔氏から博士の死に顔は活き〳〵として眠つて居らるるのではなからうかと思はれた、私は内外人多数の死に顔も見たが、博士の如き活々として大往生を遂げられた人に遇ふた事はないとて博士の大語□(欠)底を

讃し、次で松山程三氏の感激極まる祭文の後焼香に移り

新田本願寺輪□(欠)、親戚総代土田忠二、東洋大学、京北中学、京北実業総代、東洋大学田中教授、来賓総代小須賀助役、門□(欠)総代満日社長小山内大六氏、県人会総代坂井慶治氏、門徒総代、各宗総□(欠)西本願寺別院脇谷輪番

の焼香門弟総代小山内大六氏、親戚総代土田忠二氏の謝辞あつて式を閉ち来賓一同に休憩所に於て昼食の饗応をなして極めて厳粛裡に式を終つた

故井上円了博士の記念碑除幕式

各名士の祭詞弔文により更に故先生の遺訓は光る

大連市街を一眸の裡に納める景勝の地市内若草山大谷派関東別院境内の山腹に予て建設中であつた故文学博士井上円了氏の記念碑は此の程竣工して七周忌の祥月命日に当る六月六日を期して盛大な除幕式が挙行された碑前には東洋大学及京北中学出身者一同、仏□(欠)各宗教会、新潟県人会、土田遺族総代等の花環献花を供へ

香煙縷々と立ち昇り午前十時過ぎ参会者一同碑前に参列し大谷派別院新田輪番導師の下に伽陀、除幕後信徒総代斎藤弁護士は建碑の由来を述べて開式の辞に代へ僧侶の読経、日曜学校生徒の讃仏歌合唱あり次いで除幕式参列の為め来連した東洋大学教授田中治六氏は式辞として大要左と如き故人の遺徳を述べた

先生の墓が満洲に出来た事には三つの意義がある第一は先生が明治二十年頃の欧化熱の旺んな時に当つて東洋固有の精神を発揮せよと提唱された事と第二には先生の民衆教化主義、第三には世界何処の地をも墳墓とせよと如実に教訓されたこの三ケ条は実に現代から見ても充分の意義ある遺訓である

次いで杉野市長の祭文あり立川雲平氏は

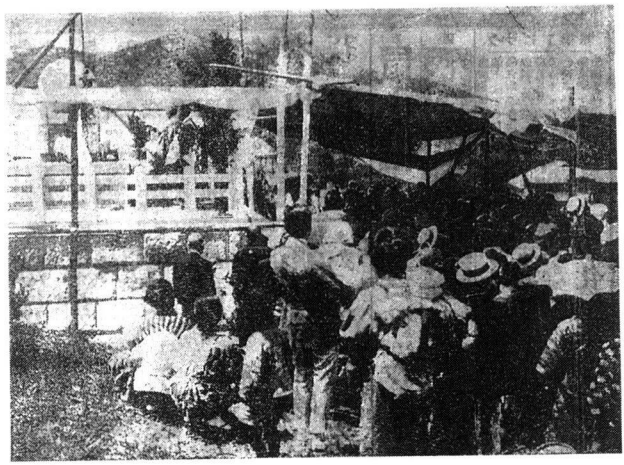
人と生国に深い関係があるとすれば又終焉の地と人との間にも密接な関係がなければならない先生の墓が満洲の地に出来た事は大連の共同墓地の墓石が

年々一向に増加せない事に鑑みて我が在満邦人に偉大な教訓を与へるもので我々在満人は先生の精神に倣ひ終焉の地を墳墓と定めて海外発展に尽さねばならない事を痛感する、又先生の「囲碁亡国論」と「健忘術」の二説は私の感銘する処であるが特に囲碁亡国論は畢竟賭博を戒めたもので粛親王が清朝を亡したものは阿片と麻雀であると唱へた麻雀に耽る大連の紳士達はこの若草山から先生の霊が諸君を監視してゐるものと記憶され度い

と感想を述べて祭詞に代へ満鉄上田秘書役の先生の臨終を追憶して故人の大悟徹底した円満な大往生は必ず哲学以外に安心立命の道に悟入されてたものであらうと述べて祭詞となし新潟県人会松山程三氏の祭文および弔電朗読あり仏教各宗代表脇谷本派別院輪番、遺族総代土田忠二氏、学校代表田中治六氏、小数賀助役等の焼香あり門弟代表小山内大六氏遺族代表土田忠二氏の謝辞あつて信徒総代野村氏の閉式の辞を以て式を閉ぢ参列者一同に折詰の饗応あり正午過ぎ散会したが参列者多数に上り甚だ盛会であつた

祭　文

緑蔭清和の時予て大谷派本願寺大連別院境内に建設中の故文学博士井上円了氏の記念碑除幕式を挙行せらるるに方り故博士の崇高なる人格を偲びて感慨転た無量なるを覚ゆ、故井上博士は欧化熱旺盛なる時に於て東洋固有の精神を発揮するに努め又哲学館を建設して亜細亜文化の為めに貢献せられたるのみならず其の深奥なる哲学的智識を以て民衆教化に尽し又邦人の海外発展の指導に力を致されたるは吾人の敬仰措く能はざる所なり而して故博士満鮮巡講の途次偶々此地に客死せられたるは「世界何処の地をも墳墓とせよ」てふ博士生前の持論に拠り躬ら範を後世に垂れられたるものと謂ふべく博士も亦之を本懐とせられしならん博士が大連幼稚園に於て卒去せられし時は人皆愕哀惜せざるはなく今にして其の当時を追想せば恍として夢の如し本日故博士の七周忌に当り哀愁更に新なるものあり茲に虔みて敬弔の誠悃



故 井上円了博士記念碑除幕式

七年前大連で客死された井上円了博士の記念碑が建てられたので六日その除幕式は盛んに行はれました

を致す

大正十五年六月六日

大連市長杉野耕三郎

本資料は、資料一、二と同じく井上民雄氏より提供を受けたものである。内容は、大正一五（一九二六）年六月六日に中国の大連において挙行された井上円了記念碑除幕式の模様を親戚総代として出席した土田忠二氏（円了の次女の義父）が井上円了の子息玄一氏宛に記した書簡である。この記念碑は井上円了の七周忌を記念し、校友や学生等関係者の寄附金によって建設されたもので、その形状は東京中野の蓮華寺にある墓と同一であった。資料にみるとおり、除幕式を報じた新聞の切り抜き記事を同封して当日の状況を伝えている。

センター日誌

主な活動記録

平成9年度

4・10　『井上円了の教育理念』読後感想文コンクール検討小委員会

4・12　第Ⅲ期研究員全体会

4・20　『サティア』第26号発行

4・24　井上円了関係資料調査の協力依頼のために全日本仏教会訪問

5・8　越路円了会・高橋健吉氏来室（越路町講演会打ち合わせ）

展示会『東洋大学の創立者　井上円了の世界』（川越校舎、5月14日まで）

5・13　全国大学史資料協議会総会（神奈川大学）

5・15　展示会『東洋大学の創立者　井上円了の世界』（朝霞校舎、5月22日まで）

5・20　機関誌『サティア』小委員会

5・23　出版小委員会

5・27　展示会（板倉キャンパス開学式）『東洋大学の歩みをたどる』『東洋大学の創立者　井上円了の世界』「井上円了の書3点」（板倉校舎図書館）

5・28　展示会『東洋大学の創立者　井上円了の世界』（板倉校舎、6月10日まで）

5・31　センター会議（第1回）

特別セミナー「やさしくわかりやすい　技術の世界と人間」（第1回　講師・文部省学術情報センター所長　猪瀬博氏）

6・6　学祖祭（蓮華寺）

全国文化講演会（新潟県越路町　講師・高木宏夫名誉教授）

展示会『妖怪学の世界』（新潟県越路町〔越路

円了会)、6月12日まで)

6・7　特別セミナー(第2回　講師・菅野卓雄学長)

6・9　『井上円了の教育理念』読後感想文コンクール選考委員会(第1回)

6・13　展示会『妖怪学の世界』(新潟県立長岡高等学校、6月25日まで)

6・14　全国文化講演会(石川県七尾市　講師・比嘉佑典教授)

特別セミナー(第3回　講師・伯野元彦教授)

6・18　学祖祭記念講演会(白山校舎　講師・神作光一教授)

6・19　『井上円了の教育理念』読後感想文コンクール検討小委員会

6・21　特別セミナー(第4回　講師・掘越弘毅教授)

6・28　特別セミナー(第5回　講師・国際基督教大学教授　村上陽一郎氏)

7・3　展示会『妖怪学の世界』(長岡市立中央図書館、7月6日まで)

7・4　『井上円了の教育理念』読後感想文コンクール選考委員会(第2回)

7・5　特別セミナー(第6回　講師・赤塚雄三教授)

7・7　『井上円了の教育理念』読後感想文コンクール実行委員会(第1回)

7・8　展示会『東洋大学の創立者　井上円了の世界』(白山校舎、7月18日まで)

7・12　『井上円了の教育理念』読後感想文コンクール表彰式(白山校舎)

7・14　運営委員会(第1回　通算第18回)

7・15　全国文化講演会(北海道江差町　講師・天野マキ教授)

展示会『納涼　幽霊画コレクション』(埼玉県立博物館、8月21日まで)

7・20　『サティア』第27号発行

『井上円了センター年報』第6号発行

8・27　『井上円了の教育理念』読後感想文コンクール〝井上円了ゆかりの地への旅〟(京都、29

日まで）

10・8　センター会議（第2回）

10・9　大倉精神文化研究所来室

10・13　全国大学史資料協議会総会・全国研究部会（仙台、15日まで）

10・19　全国文化講演会（富山県富山市　講師・本学元教授　一番ヶ瀬康子氏）

10・20　運営委員会（第2回　通算第19回）

『サティア』第28号発行

10・22　全国文化講演会（福井県今庄町　講師・小池喜明教授）

10・25　越路円了会、東洋大学・哲学堂見学のため来校

10・29　出版小委員会

11・1　哲学堂祭（中野区哲学堂公園）

11・8　シンポジウム「百人一首の文化史」（於白山校舎）

11・21　愛知大学東亜同文書院大学記念センター来室

11・26　全国大学史資料協議会研究部会（明治大学）

12・12　事業小委員会

12・13　公開研究会（白山校舎　講師・筑波大学歴史人類学系講師　中野目徹氏）

12・24　東京大学へ資料調査

1・20　『サティア』第29号発行

1・22　全国大学史資料協議会研究部会（中央大学）

1・31　出版小委員会

2・5　『井上円了の教育理念』読後感想文コンクール実行委員会（第2回）

2・24　神奈川大学来室

3・20　機関誌『サティア』小委員会

3・26　全国大学史資料協議会研究部会（早稲田大学）

講演会・シンポジウム

越路町講演会（新潟県）

講師　高木宏夫（東洋大学名誉教授）

「オバケと円了先生」

日時　平成9年6月6日(金)午後7時～9時30分
場所　越路町福祉センター
主催　越路円了会
　　越路町教育委員会
後援　東洋大学井上円了記念学術センター

七尾市講演会（石川県）
講師　比嘉佑典（東洋大学文学部教授）
「親や教師はいじめの問題とどう向き合うか」
日時　平成9年6月14日(土)午後1時～4時30分
場所　七尾市サンライフプラザ
主催　七尾市ＰＴＡ連合会
共催　七尾市教育委員会
後援　東洋大学井上円了記念学術センター

学祖祭記念講演会
講師　神作光一（東洋大学文学部教授）
「百人一首の文化史　―その多様な世界―」
日時　平成9年6月18日(水)午後2時～4時
場所　東洋大学白山校舎新1号館一一〇二番教室
主催　東洋大学井上円了記念学術センター

江差町講演会（北海道）
講師　天野マキ（東洋大学社会学部教授）
「心の時代　～充実した日々のために」
日時　平成9年7月15日(火)午前10時～11時40分
場所　江差町文化会館ホール
主催　シニアカレッジ江差学園
後援　東洋大学井上円了記念学術センター

富山市講演会（富山県）
講師　一番ヶ瀬康子（元東洋大学社会学部教授）
「社会福祉の今日と明日」
日時　平成9年10月19日(日)午後1時30分～3時30分
場所　富山県女性総合センター

主催　富山市社会福祉協議会
富山市ボランティアセンター
富山市ボランティア連絡協議会
後援　東洋大学井上円了記念学術センター
北日本新聞社
富山新聞社

今庄町講演会（福井県）
講師　小池喜明（東洋大学文学部教授）
「日本人の美意識」
日時　平成9年10月22日(水)午後7時30分〜9時
場所　今庄町保健センターホール
主催　今庄町中央公民館
福井ライフアカデミー本部
後援　東洋大学井上円了記念学術センター

哲学堂祭
講師　針生清人（東洋大学文学部教授）
「ソクラテスの道徳的信条」
日時　平成9年11月1日(土)午前11時〜11時30分
場所　中野区哲学堂公園
主催　学校法人　東洋大学

シンポジウム
テーマ　百人一首の文化史
司会進行　神作光一（東洋大学文学部教授、歌人）
講師　秋山忠彌（江戸史研究家）
有吉　保（日本大学名誉教授）
橘　りつ（東洋大学文学部教授）
中根三枝子（東洋大学短期大学講師、歌人）
渡辺令恵（全日本かるた協会　現クイン位）
日時　平成9年11月8日(土)午後1時〜5時30分
場所　東洋大学白山校舎新1号館一一〇二番教室
主催　東洋大学井上円了記念学術センター

特別セミナー(全6回)

総合テーマ　「やさしくわかりやすい　技術の世界と人間」

場所　東洋大学白山校舎新1号館一四〇四番教室

講師　猪瀬　博（文部省学術情報センター所長）

「情報技術と社会」

日時　平成9年5月31日(土)午後2時～4時

講師　菅野卓雄（東洋大学学長）

「エレクトロニクスの世紀　―20世紀―」

日時　平成9年6月7日(土)午後2時～4時

講師　掘越弘毅（東洋大学生命科学部長）

「バイオの世界」

日時　平成9年6月14日(土)午後2時～4時

講師　伯野元彦（東洋大学工学部長）

「地震の世界」

日時　平成9年6月21日(土)午後2時～4時

講師　村上陽一郎（国際基督教大学教授）

「科学・技術と社会」

日時　平成9年6月28日(土)午後2時～4時

講師　赤塚雄三（東洋大学国際地域学部長）

「社会の発展と技術」

日時　平成9年7月5日(土)午後2時～4時

刊行物

・『井上円了センター年報』第6号

・機関誌『サティア』第26～29号

・『井上円了選集』第14、15巻

・井上円了『新編　全国巡講日誌』

兵庫県編、鳥取県・島根県編、岡山県編、広島県編、香川県・愛媛県編

・『井上円了の教育理念』（改訂第2版）
・平成9年度『井上円了の教育理念』
　読後感想文コンクール入賞作品集
・えっせんてぃあ選書5　『江戸学入門　衣・食・
　医・ことば』（井上円了記念学術センター編、すず
　さわ書店発行）
・えっせんてぃあ選書6　『現代科学の最前線』（井
　上円了記念学術センター編、すずさわ書店発行）

収集資料一覧

一九九七年四月～九八年三月末日

受贈資料〔個人・機関〕五十音順・敬称略

飯塚勝重（元本学職員・一九六一年文学部卒）

大正五年の井上円了巡講関係資料（山形県小国町）　一部

『東洋大学事務電算化トータルシステム基本構想―東洋大学事務機械化の歩み　その二―』（一九八五年）　一冊

学部事務室改組のための準備諸案（一九八六年）　ファイル一冊

事務局機構改革について（答申および回答　一九八六年）〔複写〕　八枚

学校法人東洋大学の組織並びに諸規程等検討委員会建議書（一九八七年）〔複写〕　一綴

学部学科増設No.一（一九八六～八八年）　ファイル一冊

総合計画No.三　昭和六二年以降　ファイル一冊

総合計画　平成元年度以降　ファイル一冊

『朝霞キャンパスのマスタープラン作成の考え方（案）』（一九八六年）　一冊

六二年九月八・九日　部長研修会資料（一九八七年）　一綴

事務局機構改革について（回答）（一九八八年）〔複写〕　六枚

『事業報告書』（昭和六三年度、平成元年度、平成三～五年度、平成八年度）　六冊

一〇〇年史編纂事業に係わる引継事項（一九八八年）　八枚

『学校法人東洋大学寄附行為―規程集抜粋―』（一九八八年）　一冊

学校法人実態調査表〔平成元年度〕（抜粋）〔複

写〕　三〇枚
一八歳人口の推移（一九九〇年）　一綴
『データ　ブック』（東洋大学）（一九九〇、一九九五～一九九七）　四冊
平成三年度入学試験関係資料　ファイル一冊
『大学資料』第一一五・一一六合併号（一九九一年）　一冊
平成四年度　大学院在籍者数・入試状況数調査　二枚
平成五年度　予算編成における予算要求上の「年度計画事項」に関する見解（一九九二年）　五枚
一九九二年度　大学設置基準上の教員数と現員数対比表〔複写〕　一枚
東洋大学内線電話番号簿（白山・朝霞・川越）（一九九二年）　一綴
経営上の理念に関する教職員組合からの質問について（回答案）（一九九二年）〔複写〕　二枚
橋本万平「コックリさん」考（『日本古書通信』第七七〇号　一九九三年）〔複写〕　二枚
板倉に進出の場合の本学財政の収支見通しとその財源対策（一九九三年）〔複写〕　一綴
板倉キャンパスの概要　参考資料（一九九三年）　一綴
板倉キャンパス寄付金募集関係資料（一九九五年）〔複写〕　四枚
東洋大学板倉キャンパス新学部構想の概要　一綴
井上円了頌徳碑に係わる越路関係者の要望およびそれに対する回答（一九九四年）〔複写〕　四枚
白山再開発第Ⅲ―二期における諸施設について（一九九五年）　二枚
第Ⅱ期工事〈図書館研究棟・事務局食堂棟〉概要（一九九四年）　八枚
『一九九三年（平成五年度）職員総合研修（基礎過程Ⅰ）報告書』（一九九四年）　一冊
「Internashonal Programs News」No.五、六（一九九五年）　一枚

「校友会ジャーナル」第三三号（一九九五年）　一枚
新潟県焼田川樋管待機所工事関係資料（一九九五年）　一部
『東洋大学百年史』完成報告会（一九九五年）　一綴
井上円了記念学術センター施設について（一九九五年）　一綴
井上円了記念学術センター引継書（一九九五年）　一枚
『東洋大学の新世紀　東洋大学板倉キャンパス新学部募金趣意書』（一九九五年）　一冊
生涯学習センター事務室開設準備関係資料（一九九五年）　一部
東洋大学経理システム操作説明書（一九九五年）　三綴
事務系職員の早期退職優遇制度について（骨子案）（一九九六年）　一枚
創立者井上円了先生の生涯と教育理念（一九九六年）　六枚
学校法人東洋大学経理規程等の一部改正について（案を含む）（一九九六年）　一部
あの大学にはこんなスゴイものがある！（『蛍雪時代』所載記事）（一九九六年）〔複写〕　五枚
経理システム（予算執行サブシステム）の運用開始について（一九九六年）〔複写〕　一綴
平成八年度補正予算説明書　一綴
平成八年度資金収支補正予算書　一綴
平成八年度消費収支補正予算書　一綴
平成八年時点の東洋大学出身教員（大学院出身も含む）　一綴
『国際交流センター白書』（一九九五年）　一冊
東洋大学文書規程の制定について（通知）（一九九六年）　一綴
一九九六年度新入生教育日程表（案）　三枚
「賢者の落語」（『とらでん報』第五号　一九九七年）　一冊

「〝眠れる〟資料五万点　解放直後の一部を公開　朴慶植氏所蔵」（『東洋経済日報』第四一二二号　一九九七年）　一部
『出会い　中一学年通信「鶏がね」縮刷版』（一九九七年）　一冊
東洋大学板倉キャンパス竣工式案内状（一九九七年）　一枚
「東洋大学百年史」の頒布について（一九九七年）　一枚
『一九九七　DATA BOOK』（入試関係）　一冊
『NEWS LETTER』通巻第二六号（一九九七年）　一冊
『パァイディア―明日の教員を目指す君に―』八号（一九九七年）　一冊
（仮称）東洋大学朝霞自然科学研究演習施設増築工事　一綴
東洋大学朝霞校舎案内図　一枚

大倉精神文化研究所

『月例講話集　第十三輯　東洋のこころ（二）』（一九九五年）　一冊
大倉邦彦著『感想（其十）』（一九三四年）　一冊
〃　『感想（其十一）』（一九三五年）　一冊
〃　『感想　其十三』（一九三七年）　一冊
〃　『感想』（一九八二年）　一冊
大倉邦彦「感想―研究所創立三十周年に際して」（『大倉山論集　第八輯』抜刷　一九六〇年）　一部
大倉邦彦著『THOUGHTS』（一九二六年）　一冊
〃　『MY THOUGHTS』（一九二六年）　一冊
〃　『MY THOUGHTS』（一九三五年）　一冊
大倉山坐禅会『道本圓通』（一九六八年）　一冊
『大倉山論集　第十輯　大倉邦彦先生追悼号』（一九七二年）　一冊
『大倉邦彦旧蔵書目録　和書』（一九九二年）　一冊

太田次男（成田山仏教研究所客員研究員・慶應義塾大学名

誉教授）

太田次男「近代成田の礎を築いた先師」（十一）〜（十五＝完）（成田山だより『智光』四一九〜四二四巻　一九九七〜九八年）　五冊

井上円了『成田志林』発刊祝文（『成田志林』第一号　一八九四年）〔複写〕　一枚

井上円了「仏教ノ論理」（『成田志林』第一号　一九八四年）〔複写〕　一枚

「哲学館生徒遠足会」（『成田志林』第一号　一九八四年）〔複写〕　一枚

安藤箋水「成田記行」（『成田志林』第二号　一九八四年）〔複写〕　二枚

井上円了関係記事（『成田志林』第二号　一九八四年、第九号　一九八五年）〔複写〕　二枚

緝熙館生徒募集広告（『成田志林』第一一号　一九八五年、第一二号　一九八五年、第一八号　一九八六年）〔複写〕　三枚

井上円了「統計上我邦ノ寺院僧侶ノ多寡ヲ論ス」（『成田志林』第一五号　一九九六年）〔複写〕　二枚

中迺舎主人「遊成田山記」（『成田志林』第一五号　一八九六年）〔複写〕　一枚

東洋哲学雑誌広告（『成田志林』第一八号　一九八六年、第二七号　一八九七年）〔複写〕　二枚

成田山宛井上円了および哲学館葉書（『成田志林』第二一号　一八九六年）〔複写〕　一枚

哲学館入学募集広告（『成田志林』第二一号・第二二号　一八九六年）〔複写〕　二枚

哲学館仏教専修科開設広告（『成田志林』第三〇号　一八九七年）〔複写〕　一枚

哲学館関係記事（『成田志林』第三五号　一八九七年）〔複写〕　一枚

哲学館報告（『成田志林』第三七号　一八九七年）〔複写〕　一枚

丹生屋隆道「石川僧正を憶ふ」（『不亡録』所載　一九二四年）〔複写〕　一枚

茅野良男（大阪国際大学教授・大阪大学名誉教授）
「井上博士講話筆記」その他関係記事（『修道会雑誌』第四号　一九〇八年）〔複写〕　一二枚
小鷹健一（一九四六年文学部卒）
予科一年富士裾野演習（一九四二年）〔写真〕一点
予科一年クラス旅行　水郷廻り（一九四二年）〔写真〕　一点
小谷種夫（鳥取市温泉旅館小銭屋）
井上円了筆書軸〔写真〕　一点
高橋健吉（越路円了会会長・新潟県三島郡越路町在住）
高橋健吉「和同会の創始者」（『長岡高校同窓会会報』第二八号　一九九七年）〔複写〕　一枚
寺井俊道（東京都豊島区寶城寺住職）
井上円了筆扁額〔情報提供〕　一点
仲村修（阪南大学講師）
金敬注「東洋大学正門과나」（『四海公論』一九三六年）〔複写〕　二枚
方定煥「尾行された話」（『韓国・朝鮮児童文学評論集』所収　一九九七年）〔複写〕　七枚
新潟県立長岡高等学校
井上円了著『襲常詩稿』（一八七二年）〔複写〕　一冊
長岡第一分校校監局『日誌』一八七四―七六年〔複写〕　三冊
井上円了「井上博士の講演」（『和同会雑誌』第三八号　一九〇六年）〔複写〕　四枚
井上円了「偶成数首」（『和同会雑誌』第四五号　一九〇九年）〔複写〕　二枚
井上円了「祝和同会創立三十五年紀念祭」（『和同会雑誌』第四六号　一九〇九年）〔複写〕　三枚
井上円了「海外に雄飛せよ」（『和同会雑誌』第五五号　一九一四年）〔複写〕　四枚
井上玄一「円了博士の想い出」、川上四郎「井上円了さんの思い出」（『和同会雑誌』第一一一号　一九七二年）〔複写〕　四枚
井上円了筆書軸〔写真〕　三点

井上円了筆扁額〔写真〕　二点

『在越路町　井上圓了先生遺墨控』（一九八七年）　一冊

西野平治（北海道亀田郡在住）

井上円了著『日本周遊奇談』（一九一一年）　一冊

長谷川潤治（新潟県立長岡高等学校教諭）

「越路出身　哲学者井上円了　郷里の偉人にスポット」（『新潟日報』一九九七年）〔複写〕　一枚

長谷川潤治「井上円了・少年期の漢詩集『襲常詩稿』を読む㊤㊦」（『新潟日報』一九九七年）〔複写〕　一枚

長谷川潤治「町内探訪　井上円了生誕地」、「〃　井上円了と学塾」、「〃　パロディスト円了」（「ミヤコ新聞販売センター」PR紙　一九九七年）〔複写〕　三枚

松崎研定（長野県上伊那郡聖徳寺住職）

井上円了筆色紙（「寺報」掲載記事）〔複写〕　一枚

三浦節夫（本センター専任研究員）

『越路円了会会報』創刊号　一枚

井上円了と小泉八雲の接触関係資料（広瀬朝光著『小泉八雲論―研究と資料』抜粋　一九七六年）〔複写〕　六枚

小泉八雲著作中の井上円了に関する記述部分（小泉八雲著、平井呈一訳『日本瞥見記　下』抜粋　一九八六年）〔複写〕　二一枚

資料室レファレンス・資料貸出等記録

一九九五年一〇月～九八年三月

年月日	依頼者（所属等）	種類	内容
【一九九五年度】			
95・10・25	岡田利久（獣医）	調査	自宅に所蔵する井上円了筆の掛け軸の内容について調査。井上センターでの鑑定書等の発行の有無について回答。
10・30	真宗大谷派宗務所	調査	東洋大学の卒業生で児童文学者、山本和夫の著書『日本の目　なむあみだぶつ戦争』を原作とした漫画本作製の企画があり、著者と連絡をとりたいとのことで現住所を調査。
11・14	横井英夫（住職）	調査	横井健明（明治二八年七月卒業）が在学していた当時、哲学館内に「法学院」というものがあったか調査。また、哲学館の名称を変更した年について報告。
11・15	朝日新聞社	調査	大倉邦彦（第一〇・一一代学長）と東洋大学との関係を知るための大倉邦彦関係の資料（著書）について調査。

12・1　小嶋昭道　調査　皇順諒という人物に関する資料はないか調査。

12・5　日本女子大成瀬記念館　調査　『東洋大学百年史』資料編、通史編の刊行経緯と「資料集」刊行の有無等について報告。

96・1・8　小嶋昭道・福井雅英　来室　皇順諒関係資料の所在を確認。

1・29　井上センター事務室長　調査　明治期、哲学館に在学していた青樹憲勇の所属学科等について調査（遺族から大学に対して資料提供の意向があるため）。

【一九九六年度】

6・22　李相琴（梨花女子大学校名誉教授）来室　方定煥（韓国における児童文学関拓者）の研究のため、留学先であった東洋大学側の関係資料を調査・提供。

7・1　校友会　調査　東洋大学旧制予科寮歌・応援歌の作詞者について、これを資料的に確認できるものはあるか調査。

7・2　杉田氏　調査　本庄可宗の在籍および担当学科とその思想の影響について、および後継者として現在大学で教鞭を執っているものはいるかどうか調査。

7・25　松坂信光　調査　自宅に所蔵する井上円了筆の扁額に書かれている内容について調査。

9・6　松坂信光　調査　井上円了筆の扁額に書かれている「鬼」の意味と北海道以外を巡講した際の『南船北馬集』中に「鬼」を使用しているものを調査。ま

た、北海道から井上センターに寄せられた井上円了の揮毫に関する情報の有無について報告。

9・10　許晃会（大田産業大学校）　調査　東洋大学の「名」とそれに絡んだ話について調査（その「名」はいつだれが付けたものか、名付けられた手順や名の意味、名付けた理由・過程・結果、大学名の一般公募（内部公募も含めて）の有無などについて）。

9・26　佼成出版社　資料貸出　『図説　日本仏教の歴史　近代』に掲載したいとの依頼要請を受けて、井上円了・境野黄洋（第四代学長）等の写真（ネガフィルム・紙焼き）一一点を貸し出し。

11・20　安部氏　調査　佐久間鼎（第二二代学長）のドイツ留学年について調査。また、安部重孝という人物に関する資料の有無について調査。

11・27　総務課　調査　明治二四年から三〇年頃に哲学館に在籍していた前田儀作（林外）に関する情報はないか調査。

12・17　放送技術社　資料提供　新潟テレビ二一『いきいきワイド』の「県人再発見クイズ」で、井上円了および哲学館の写真を使用したいとの要請を受け、『図録東洋大学一〇〇年』を提供。

12・17　桃山学院大学　調査　宮崎幸三（元東洋大学教授）の生年および在籍年について調査。

97・1・27　付属図書館　資料貸出　井上円了肖像のネガフィルムおよび紙焼き二点を貸し出し。

2・8　学習院大学資料室　調査　昭和二四年頃、東洋大学に「東洋高等学校」という付属学校はあったか調査。

【一九九七年度】

4・8　渡辺悦次（日本労働研究機構）来室　南部（旧姓五明）胖（卒業生）という人物の所属学科および卒業年を確認。

4・17　二平正久　来室　自宅に所蔵している井上円了筆の書（まくり）の字とその意味を調査。

4・18　人事課　調査　歴代学長で叙勲したものはだれか調査。

4・23　哲学堂公園事務室　調査　哲学堂四聖堂の東西南北にそれぞれの四聖を配した理由、および釈迦の性別に関して調査。

5・12　五十島一晃　調査　『山想』（法政大学山岳部）または『山岳』（日本山岳会機関誌）に伝記として掲載するため、田辺重治（元東洋大学教授）について、大学に就任した年月・担当した教科内容と役職・退職の年月・教師以外に部長をやっていたサークル名等、その経歴について調査。

5・16　付属図書館　資料貸出　井上円了筆の掛け軸二本を貸し出し。

5・16　教務課　調査　朝鮮人学生（明治から大正期に在籍した一三名）の卒業および聴講生入学の有無について確認。

5・30　埼玉県立博物館　資料貸出　季節展示室ワンポイントギャラリー夏の特集「納涼、幽霊画コレク

ション」への出品依頼要請を受け、井上円了コレクションの中の幽霊の掛け軸七本を貸し出し。

6・17　岡崎柾男（劇作家）　調査　井上円了および哲学堂文庫の妖怪関係資料について調査。

8・4　NHK　調査　大正一二年の関東大震災時に救護などで活動した学生の具体的な資料・記録について調査。

9・26　生涯学習センター事務室　資料貸出　井上円了の肖像写真一枚を貸し出し。

9・29　関西大学図書館　調査　一九二〇年代前半の東洋大学の授業開講状況と受講生の概要、一九二一年から二四年に在籍した朝鮮人留学生の概要、後に韓国の児童文化・児童文学の開拓者と呼ばれた方定煥に関する資料、その他当時の東洋大学の様子がわかる資料の有無について調査。

9・29　岩波書店　来室　田辺善知（元東洋大学講師・校友）の担当していた科目名を調査。また、『卒業生名簿』を閲覧。

10・7　太田次男（成田山仏教研究所）調査　石川照勤（明治二三年哲学館卒業、成田山新勝寺貫主）に関する資料として、どのようなものがあるか調査。

10・17～18　仲村修（阪南大学講師）　来室　方定煥（韓国における児童文学の先駆者）の研究のため、『修身』・『東洋哲学』・『修身教会雑誌』・『卒業生名簿』・『学生一覧』・『南船北馬集』・『東洋大学一覧』等を閲覧。

10・21　仲村修（前出）　調査　方定煥の東洋大学における聴講生としての記録、受講した科目、下

宿の住所・本籍、中退学の有無等について調査。

10・22　太田次男（前出）　調査　哲学館第一回卒業生の名簿について調査。

10・23　丸岡誠一（卒業生）　来室　『哲学館講義録』で神崎一作（哲学館教員）が記述している漢学者について調査するため、『漢学科講義録』を閲覧・調査。

10・24　平井誠二（大倉精神文化研究所）来室　大倉邦彦（第一〇・一一代学長）研究のため、履歴書・『東洋大学護国会々報』等を閲覧。

10・27　横田順彌（作家）　調査　哲学館出身の文筆家、南木摩天楼（本名・南木性海）の経歴について調査。

10・30　太田次男（前出）　資料貸出　成田山新勝寺の月刊誌『智光』に掲載したいとの依頼要請を受け、井上円了肖像写真紙焼き一枚を貸し出し。

11・12　平井法（昭和女子大学助教授）来室　『近代文学研究叢書七四巻　藤村作』の著述および資料年表作成のため、藤村作（第九代学長）に係わる『東洋大学百年史』・『東洋大学新聞』・『思想と文学』等の該等部分を閲覧。

11・12　河野亜里奈（慶応大学院生）来室　折口信夫と井上円了の関係を調査するため、『哲学堂由来記』・『哲学堂案内』・「哲学堂鑽仰軒拝借証」等を閲覧。

11・18　太田次男（前出）　調査　明治三九年の財団法人東洋大学の役員名、石川照勤（成田山貫主）が東洋大学の顧問となった時期、「館賓」について調査。

11・21　平井誠二（前出）　来室　大倉邦彦研究のため、『東洋大学新聞』の大倉邦彦に係わる部分を

閲覧。

11・25　太田次男（前出）　調　査　石川照勤が哲学館（哲学館大学・東洋大学を含む）へ寄付した金額について調査。

11・27　秋谷美保子　来　室　吉田二郎（外交官）の住んでいた富士前町の家は、井上円了の家の近くであると聞いているが、現在のどのあたりか。また、吉田二郎と井上円了との交遊がわかるような資料はあるか調査。

12・17　奥山直司（高野山大学教授）　調　査　河口慧海（学僧・探検家）が哲学館を卒業した正確な年月はいつか調査。

12・21　長谷川潤治（長岡高校教諭）　資料提供　井上円了研究の資料として、『井上円了選集』等を提供。

98・1・20　太田次男（前出）　調　査　井上円了に対する石川照勤の追悼文はないか調査。

1・29　平井誠二（前出）　来　室　大倉邦彦研究のため、大倉邦彦関係の写真を閲覧。

1・29　入試課　資料貸出　大正期の男女共学（授業風景）の写真一枚を貸し出し。

2・20　清水勉（本の街編集室）　来　室　坂口安吾（卒業生・小説家）に関する資料および当時の東洋大学校舎の写真等の有無について調査。

3・5　管財課　資料貸出　『東洋大学校舎継続（三期）工事御契約書』一冊を貸し出し。

3・10　中野実（東京大学大学史史料室）　調　査　井上円了が明治一一年四月に東本願寺の留学生として上京してから同年九月に東京大学予備門に入学するまでの経緯と、予備門受験に関する資料について調査。

3・18～19	手柴大輔（同志社大学院生）来室	井上円了の研究のため、『開導新聞』・『破邪新論』・『妖怪玄談』・『欧米各国政教日記』・『哲学道中記』・『勅語略解』等を閲覧。
3・19	太田次男（前出）調査	井上円了が中村正直（教育者・東大教授）の設けた塾「同人社」で教員をしていた時期と担当学科目について調査。
3・20	岡崎柾男（前出）資料提供	『哲学堂文庫目録』中にある「善知安方忠義伝」と「前太平記」に描かれている挿絵のコピーを提供。
3・26	管財課 資料貸出	『東洋大学校舎継続（三期）工事　御契約書』一冊を貸し出し。

井上円了センター年報

Annual Report of Inoue Enryo Center
Vol. 7

東洋大学

執筆者紹介

小池喜明　兼担研究員・文学部教授
瀧田夏樹　兼担研究員・文学部教授
小泉 仰　慶應義塾大学名誉教授
茅野良男　大阪国際大学教授・大阪大学名誉教授
三浦節夫　専任研究員
豊田徳子　井上円了記念学術センター資料室員
斎藤弘行　兼担研究員・経営学部教授

井上円了センター年報　第7号

1998年7月20日　発行

編集　東洋大学井上円了記念学術センター

発行者　所長　新田幸治
東京都文京区白山5-28-20　〒112-8606　Tel.03-3945-7555

装幀者　蟹江征治

印刷所　㈱明文社